In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University marge to Osaka Metropolitan University

Title	(第 6 章)ワークショップの意義と展望
Author	掛川 直之, Watson A., 前阪 千賀子, 山田 真紀子
Citation	URP「先端的都市研究」シリーズ. 10 巻, p.23-30.
Published	2017-03-25
ISBN	978-4-904010-25-9
Type	Book Part
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学都市研究プラザ
Description	刑務所出所者の更に生きるチカラそれを支える地域のチカラ/ (第 I 部)刑務所ぐらし、シャバぐらしワークショップ
DOI	

Placed on: Osaka City University

Osaka Metropolitan University

第６章

ワークショップの意義と展望

掛川直之・A.WATSON・前阪千賀子・山田真紀子

１　事実を知り、常識を疑うための学び

犯罪者はみな極悪人だ、治安が悪化している、釜ヶ崎は犯罪の温床になっている……。さまざまな思い込みがわたしたちの頭のなかを支配している。だが、じっさいには、近年、統計のうえでの犯罪の数は減り続けているし、矯正施設のなかには高齢者や障がい者があふれているし、釜ヶ崎は福祉のまちにかわりつつある。日本のメディアは、ひとつの残虐な犯罪が起これば、その事件を連日センセーショナルに報道し煽り立てる。わたしたちは、稀に起こる残虐な犯罪について、その報道を見聞きするうちに、あたかも自分にごく近い身のまわりで起こっている「狂気」だという錯覚に陥る。

犯罪という現象や、罪を犯した（もしくは問われた）人びとについて考えるうえでは、まず、その現象や人びとについて知ることが不可欠である。一定の事実を知ることで、これまで自分が考えていたさまざまな「狂気」の大部分が、たんなる思い込みにすぎなかったと気づかされることも少なくない。犯罪者はみな極悪人である、といった思い込み――常識――は、有罪判決を受けたことのないわたしたちにとっての都合のよい「常識」的な観念にすぎないのだ。

また、わたしたちは、じしんやその大切な家族や友人が、犯罪の被害者になることを想像することはあるが、犯罪の加害者になることはほとんど想像することはない。しかし、自動車を運転していれば人を撥ねてしまうこともありうるし、満員電車に乗っていれば痴漢に間違われる（あるいは日々のストレスのはけ口としてその実行行為にいたる）ことも十分にありうる。愛憎のなかでだれかを傷つけたり、殺めてしまうことすらもないとはいい切れないだろう。犯罪という行為は、それを禁止し、罰する規範からの逸脱にすぎない（むろん、違法性や有責性の判断はともなう）。当然に、被害者にも、加害者にもなりうる。着目すべきは、なぜ、その行為にいたったのか、という事情や過程に目をやらなければ問題の解決へはつながらない。

このワークショップは、そのような事情や過程について、じっさいの処遇や支援の現場で活躍する担い手の生の声にふれられる、というところに最大の特徴がある。刑務所のなかで、受

刑者の「姿」の実態を伝え聴くことには、「想像力」をかきたてる効用があろう。事実を的確に把握し、これまでの根拠のない常識を捨てるための学びの場として、このワークショップは大きな意義がある。このようなとりくみを草の根でつづいていくことで、都合のよい常識に疑いをもつ人がひとりでも増えるように努力をつづけていく必要があるのはないだろうか。

（掛川 直之）

2 Impressions on the conference on prisons I attended.

The idea of a conference on aspects of prison bringing together a variety of people working and living in the Kansai area to enable them to exchange information, make introductions form networks and to discuss topical matters was eminently good. It value was clearly appreciated by the considerable number who attended and which included university academics, probation officers, psychologists, persons from the Ministry of Health, Welfare and Labour involved in resettling older and disabled prisoners and representatives of religious groups. A great strength of the conference was that it was open to ordinary citizens, a number of whom did join. Indeed some very interesting contributions were made by them including that from a young women who explained how she had been drawn into drug addiction and sex work, but who had been able to successfully transform her life.

The presentation from by a Christian pastor, a former yakuza member, on his work in prison was highly informative of contemporary penal conditions and the need to increase the opportunity for prisoners to be able to talk to prison staff, volunteers and each other to enhance their skills in communication which are so important when released. The view by the pastor that prison was not the answer to drug addiction was also clearly put.

The meeting was well organised and efficiently chaired, allowing all who wished to express opinions and share information. Persons also discussed matters informally afterwards.

Thanks to translations kindly made by Dr Megumi Yasuda, to whom I am very grateful, I was able to follow the proceedings and ask questions to members afterwards which were of much help to my research on probation and drug addiction in Japan.

In my opinion it was a well organised, informative and useful conference to which I was fortunate to be invited.

(A. WATSON)

[翻訳]　参加した刑務所に関するカンファレンスに対する感想

関西で働いている、あるいは住んでいる様々な人々が一堂に会して、情報を交換するために刑務所に関するカンファレンスを行う、という発想はネットワークの形成につながる。また、議論は非常に評価できるものであった。

研究者、保護観察官、心理学者、地域生活定着支援センター職員といった人々が参加していた点に、このカンファレンスの良さがあった。このカンファレンスの強みには、一般市民に開放されており、実際に数人市民が参加していたという点がある。いくつか非常に興味深い発言が参加者からなされた。そのなかには、いかにして薬物依存とセックスワークに陥ったかについて説明をした若い女性もいた。彼女は、その後立ち直ることができた。

元やくざで現キリスト教牧師である森氏による、彼の刑務所内での活動に関する話題提供は、近時の刑罰の状況と出所後重要となるコミュニケーションスキルを高めるために刑務所職員、ボランティア、そして相互に語ることができる機会を増やすことの必要性に関して有益な情報を提供するものであった。刑務所は薬物依存への解決策ではない、という森氏の見解も明確に示されていた。ミーティングでは意見を述べたい、あるいは情報共有したいと考えるすべての参加者が発言することができるよう、構成、進行されていた。カンファレンスの後も、参加者は有益な情報について議論をしていた。

安田恵美博士による親切な翻訳には感謝したい。カンファレンスの流れを理解し、終了後には参加者に質問をすることもでき、日本における薬物依存者への保護観察に関する私の調査に有益であった。

本カンファレンスはよく構成されており、有益であったと思われる。

（訳　安田恵美）

3　連続ワークショップにおいて参加者の視座から学んだこと

定着支援センターの相談員として入職し勤務させていただいて半年、まだまだ触法者支援の新参者であるのだが、受刑中から本人と関わり出所後の生活がより安定して持続できるよう一貫して支援できる、この仕事には日々大変やりがいを感じている。その理由は、矯正施設出所者の多くが福祉的支援なしではなかなか「シャバぐらし」に辿り着けないこと、なんとか生活を確保しても「シャバぐらし」が不安定であること、それらを苦にしてまた新たな犯罪に至ってしまうなどの現状を目の当たりにして、彼らにとっての福祉の必要性を身をもって実感できた点が大きい。

対して、全く予想外だった点もあった。それは、よく耳にしていた「司法と福祉の連携」の実態は、「刑務所ぐらし」についてかなりクローズであったことだ。福祉側支援者にはお分かりいただけるであろうが、支援対象者の生活実態や彼らを取り巻く環境をより理解深めることがアセスメントや見立てに非常に有効であるのだが、提供された情報だけでは、塀の中の暮らしぶりは想像し難く、それによって気持ちに寄り添いきれない現状はラポール形成のうえでは歯がゆくも感じた。そして、本人をより理解したいと思えば思うほど、矯正施設を覆う高い塀は一体誰にとっての壁なのか、支援という枠組みにおいては、塀の中にいるのは福祉側支援者の方ではないかとさえ感じたこともあった。

そういった実状の中、「刑務所ぐらし、シャバぐらし」の連続ワークショップでは、話題提供に日頃受刑者支援において各分野の先駆者としてご活躍されている先生方にお越しいただき、塀の中の世界について（もちろん話せる範囲で）あれこれ語っていただくことで、塀を越えた世界に住まう支援対象者の生活に思いを馳せることができて、大変有意義であった。「刑務所ぐらし」を支える医療の現状や心の拠り所としての役目を担う教誨のお話、受刑中から「シャバぐらし」を見据えて就活が行われているお話は、私だけでなく、きっと多くの参加者の心の壁も取り壊したに違いないだろう。またすべてのワークショップに参加しなくとも、興味関心のある会に参加して少しでも塀の向こう側を感じられることで、より広く支援者の輪が広がったであろうことを確信した。

また一方で、先生方のお話しを通じて、塀の中から支援を繋いでくださる方々の思いにも触れることもでき、今後はその支援の糸を絶えさないように、しっかりと「シャバぐらし」へと繋ぎ支えることができるような支援者の一人でありたいと自分自身を戒める、貴重な機会でもあった。

（前阪千賀子）

4　ワークショップに参加して

私がこのプロジェクトを安田先生方と企画した発端は、“偏見をなくすことが、社会を明るくする”ということだった。私自身もこの仕事に携わるまで、刑務所の問題や出所者の生活など具体的に考えたこともなかった。現実に、行政窓口や福祉支援者でも認知度は低く、制度の概要説明をした上で具体的な話につなぐこともしばしばであり、さらに出所者とかかわることのない人にとってはなお更他人事であり、自分とは関係のない世界だと思っているのではないかと推測したためである。そのために、フェイスブックを使って、私たちと直接的なつながりがない人にも目に触れるようにし、チラシをポップな親しみやすいイラストや色彩を意識したが、4回のワークショップを通して、犯罪ということと関係のない人にはあまり関心を持っていただけなかった。実際に参加した人の多くは、大学生以外は“刑務所”というキーワードに何等かかかわっている人たちだった。

しかし一方で、元受刑者、特に更生して支援者として活動している方々が参加してくれたのは、私が予想していなかった大きな収穫だった。受刑経験、改心することのきっかけ、そこから更生するまでの心境などを語り、このワークショップを通して、社会に発信する役割意識や人とのつながりを期待して参加していただいたようだ。特に、大学生は経験者らの体験談や受刑者の生の声に触れ、犯罪行為そのものよりも、それまでの生活歴や境遇に視点を移し、刑事政策や障がい者を取り巻く福祉制度など社会の仕組みそのものの課題や問題点を指摘していた。この機会を得るまで、国民の課題として共有しがたいテーマだと推測していたが、自分や家族に置き換えて考えることは特別難しいことではないことが実感できた。

私たちが日ごろ受刑者の出所支援をする中で特に大事にしていることは、人が人で支えるネットワークである。それは、住まいであり、仕事であり、心許せる居場所。彼らの多くは、適切な時に適切な人の温かさに支えてもらえなかったことで、社会生活での関係性にもつれが生じ、犯罪に手を染めてしまっている人が多いと感じる。私たちの試みはまだ始まったばかりであり、今回は刑務所の中をテーマに、いろんな立場の支援者から支援することの思いや意味を語ってもらい、ベールに包まれた塀の中を少しでも多くの人に知ってもらえる努力をし続けたい。

（山田真紀子）

付録２

ワークショップの感想

・まず刑務所では、何のために、何をして過ごしているのかを学び、これらのことを私自身は全く知らないのだということを痛感しました。そして、少しでも知ることで、本当に刑務所で更生をすることができるのか、社会でともに生きる方法はないのかという視点で考えることができました。様々な立場の方々が集まり、意見を交わし、このような視点で考えることは、法曹の道を目指す私自身、非常に貴重な経験となりました。本当にありがとうございました。

・ワークショップに参加させていただき、ありがとうございました。
先生が仰っていたことで印象に残っているのは、犯罪を繰り返してしまう方に、一定の資金等を付与して何かしらの興味を持たせてあげることが大事ということでした。確かに、他に興味を持てば犯罪のスパイラルから脱却できる可能性は大きいと思います。しかし、物事に興味を持つことは難しく、興味を持ってもらうために一定の支援(教室、大会等の開催)が必要なのかなと思いました。加えて、ギャンブル等ではなく、あまりお金がかからず継続でき、さらに地域の人々と関わりを持てるものである必要がある思います。そうすることによって、自己が社会の一員であることを認識でき、より犯罪への悔い改めができるようになると感じるからです。
ありがとうございました。

・ワークショップに参加して、刑務所に入る人の生活の背景について考えるきっかけになりました。どんな人が、刑務所にいるのか、何をした人が、刑務所にいるのか、その原因は何なのか、をそれぞれ考えました。冬の外での生活が、寒くて寒くて仕方がないから、刑務所に入る人、障害があって正常な判断ができないままに取り調べを受けて、自白してしまい、有罪判決が確定した人、など犯罪行為をしてしまう人の背景に目を向けて、現状ある制度や支援機関をどう活かしていくのか、また必要であるにもかかわらず現状ない制度や支援の枠組みをどう変えていくのかを、考えていく必要があるのだと実感しました。
刑務所を出て、外の空気を吸うときに、どこか居心地の悪い空気を感じていると思います。そ

れは、あまりの受容力のない社会であり、酷だと思います。
なぜなら、いつ自分が犯罪に巻き込まれるかわからず、その恐れは人間みんなにあるからで、人らしく生きるためのセーフティーネット、社会の受容力のようなものは常に必要であると感じるからです。
同じ社会に生きいて、同じ人間で、同じ空気を吸ってるはずなのにもかかわらず、美味しくない空気を吸わせてはなりません。
一人ひとりが、罪を犯してしまった人の背景に目を向けられる社会になることを望みます。またそのために、自分自身が、力を貸せるような人材になれればとおもいます。

・私はこのワークショップで、元当事者や当事者を支える人たちと出会い、改めて刑務所の中にいる人たちについて考えさせられる有意義な時間だったなと感じています。
刑務所に入っていた人達、その人達を様々な領域から支える人達の双方が集まって話し合う場所はなかなか無いと思います。
まだまだ勉強中の私としてはこのような場所はとても新鮮でありつつ、「元当事者だからわかること」「当事者を支援しているからわかること」というように、両方のお話を聞くことが出来たので自身の視野を広げる機会にもなりました。
私にとって貴重な貴重なワークショップになりました。ありがとうございました。

・大変おもしろい企画をありがとうございました。私は、第２回，第３回と参加させていただいたのですが，第２回の舩山さんのお話では普段中々お聴きすることができない，塀の中の医療事情が聞けたのではないでしょうか。当たり前のように受刑者の心身に故障があればケアをしてもらえると…でも事実，塀の中の医療体制，矯正の医療体制はかなり貧弱であり，医療の自由化とも言える医局支配制の廃止により，医師が自由に職場を選べるようになり，塀の中に行く人がいなくなり，従前より貧弱を極めています。その実情が看護師という立場でお話しいただき非常にわかりやすくみなさんに伝わったのではないかと思います。
　歯科診療が後回しであるなど，受刑者が苦痛を訴えても直ちに対応してもらえない現実など御理解いただけたのではないかと思います。私たちは仮釈放になって出所した人たちから愚痴のようにしょっちゅう聞かされていることなのですが・・・あと、矯正職員が外部に対し実情を話せるというのはかなり勇気の要る行動だということを理解して上げてください。
　第３回の　ホザナハウスの森さん、ダルクやマックに似たようなところというか，ピュアカ

ウンセリング的な当事者，経験者だからこそできる支援を実践されている様子がよくわかりました。現在，最も困難である暴力団からの足抜けなどにも一役買われているなど，我々が困難を極めているところを円滑？にされているように聞こえました。

今後も、森さんのような人たちが増えてくれば、再犯は減少すると確信しましたよ。

・私は、上司に誘われたことがきっかけでこのワークショップに参加させていただきました。

罪を犯すに至るにはさまざまな事情が絡みあっているはずなのに、世論でも政策でも本人の精神的な問題、つまり一種の自己責任論に重きを置き過ぎているのではないかと思っていたので、「シャバの空気をおいしくする会」という会の名前や、チラシに書かれてある「社会の側にも犯罪をするに至らしめている理由がある。」という言葉に魅力を感じました。

私は第３回と第４回に参加させていただいたのですが、どちらもとても勉強になりました。第３回の教誨師の森先生第、第４回の刑務所内でキャリアカウンセラーとして就労支援に携わっておられる喜多見先生、どちらの先生も受刑者の方と真摯に向き合い、一人ひとりを個人として尊重しようとされていることがわかりました。また、ゲストスピーカーだけでなく、多方面で出所者の支援を行っている参加者の方々の御質問や御感想を伺えたことも勉強になりました。

このワークショップを振り返るとき、もはや死語になりつつある「罪を憎んで人を憎まず」という言葉、また「情けは人のためならず」という言葉を思い出します。格差社会の中で、コストパフォーマンスを基準に物事が測られ、個人の資質や努力に価値が置かれすぎる現代ではなかなか耳にすることができませんが、そのような社会に私自身も息苦しさを感じてきました。しかし、その流れに反するかのように「上から目線」での更生の強制でもなく、放置でもなく、人が人間的に生きていくために必要なものを当然のこととして支援されている方々に出会い、このようなことの積み重ねがシャバの空気をおいしくしていくんだなと希望を感じました。

シャバで生きる一人の人間として、なぜシャバの空気がマズいのか、どうすればいいのか、自分に与えられた仕事のなかでどうすべきなのかということについて今後もずっと考え続けていきたいと思います。そのようなきっかけを与えていただきまして本当にありがとうございました。